



道総研

令和7年度 主な研究成果

地方独立行政法人北海道立総合研究機構

令和7年度の主な研究成果資料一覧

所属	資料タイトル（研究成果の概要）	機関名	研究制度	ページ
本部・研究推進部	ICTで進める水産業・林業・木材産業の生産性向上	戦略研究「人口減少×適応」チーム	戦略研究	1
	温室効果ガスの削減シナリオの提案に向けて	戦略研究「気候変動×緩和」チーム	戦略研究	2
	気候変動適応に向けたデータ解析と現状把握	戦略研究「気候変動×適応」チーム	戦略研究	3
農業 研究本部	直播栽培に向く美味しい水稻「空育198号」	中央農業試験場	經常研究	4
	病虫害に強い加工用ばれいしょ「北育33号」	北見農業試験場	共同研究	5
	果樹の花粉媒介昆虫マメコバチの巣筒温湯浸漬による寄生ダニ対策	中央農業試験場	公募型研究	6
	大豆有機栽培の雑草対策・密植・施肥技術の開発	中央農業試験場	經常研究	7
	農業法人の従業員が抱える課題と要望を見える化	中央農業試験場	經常研究	8
水産 研究本部	夏季高水温による養殖ホタテ稚貝の大量死と深場養殖	函館水産試験場	重点研究	9
	成長履歴の解析によるサケの生残傾向の把握	さけます・内水面水産試験場	經常研究	10
	道産ニシンの活用に向けた生食用骨軟化技術の開発	釧路水産試験場	經常研究	11
	北海道太平洋大規模赤潮の発生予察体制の構築	中央水産試験場	公募型研究	12
森林 研究本部	AI等先進技術を活用した森林資源量推定技術の開発	林業試験場	重点研究	13
	クリーンラーチ種子の品質向上技術の開発	林業試験場	重点研究	14
	おが粉の散水堆積によるマイタケの増収効果	林産試験場	經常研究	15
産業技術環境 研究本部	データ科学による化学プロセス設計の高効率化	工業試験場	經常研究	16
	青色光とAIを用いた木質化人参判別装置の開発	工業試験場	一般共同研究	17
	酒粕の風味を活かした粕漬けチーズの開発	食品加工研究センター	經常研究	18
	蓄熱池を用いた季節間蓄熱システムに関する基礎研究	エネルギー・環境・地質研究所	經常研究	19
	ヒグマの生息およびあつれき動向の把握	エネルギー・環境・地質研究所	經常・道受託研究	20
	人工湿地坑廃水浄化システムの長期運用にむけた管理法の構築	エネルギー・環境・地質研究所	道受託・受託研究	21
建築 研究本部	空き家・空き家予備軍の実態把握ツールの開発	北方建築総合研究所	重点研究	22
	日本海沿岸の最大クラスの地震・津波による被害想定	北方建築総合研究所	經常研究	23
	AIを用いたRC造建築物外壁劣化調査システムの開発	北方建築総合研究所	重点研究	24

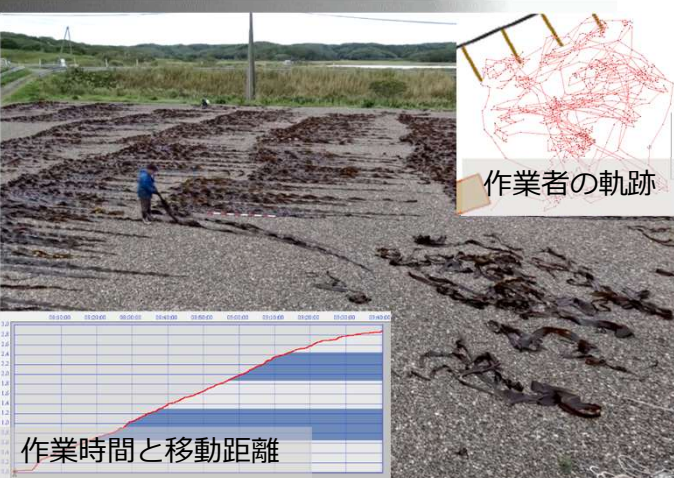
ICTで進める水産業・林業・木材産業の生産性向上

背景

労働力不足に対応し、持続可能な水産業・森林関連産業の実現に向け、北海道の地域特性を反映した省力化技術を開発する。

成果

- ### 1 コンブ産業のボトルネック抽出



作業者の軌跡

作業時間と移動距離

GPSロガー等を用いた作業実態把握
- ### 2 造林作業の省人化技術開発



人力での表示作業を
仮想表示で省人化

仮想表示による苗木の植栽予定位置の可視化
- ### 3 木材加工の自動化技術の開発



赤線内は自動認識
された変色部分

板材の三次元形状を計測

加工・検品自動化のための要素技術開発

期待される効果

次世代につながるコンブ漁業の最適化、スマート林業及びスマート木工場の実現への展開。

分担試験場（協力試験場）：釧路水産試験場、栽培水産試験場、林業試験場、林産試験場、工業試験場（北方建築総合研究所）
協力機関：日高地区水産技術普及指導所、日高地区水産技術普及指導所静内支所、十勝地区水産技術普及指導所、釧路地区水産技術普及指導所、根室地区水産技術普及指導所、散布漁業協同組合、浜中漁業協同組合、落石漁業協同組合、えりも漁業協同組合、北海道水産林務部、北海道森林組合連合会、北海道山林種苗協同組合、株式会社フォテク、株式会社築水キャニコム、松原産業株式会社、日本シードテクノ株式会社

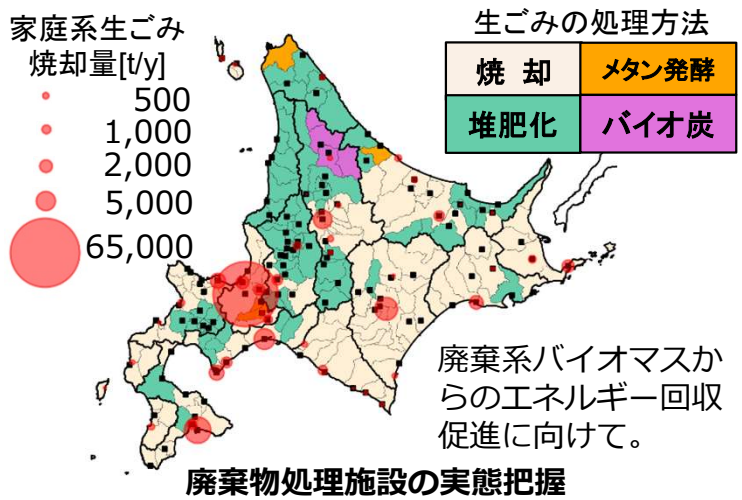
温室効果ガスの削減シナリオの提案に向けて

背景

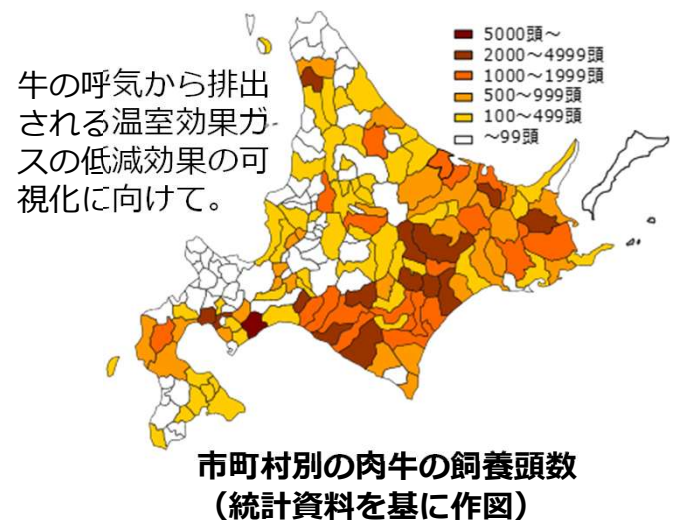
気候変動の緩和に対応するため、地域特性に応じて温室効果ガスの排出削減・吸収促進を行うための方策が必要とされている。

成果

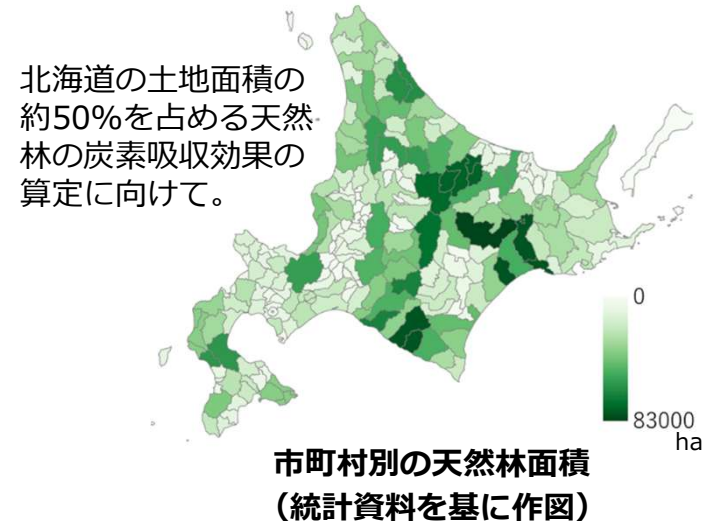
1 廃棄系バイオマスの利用実態



2 畜産分野の排出源の実態

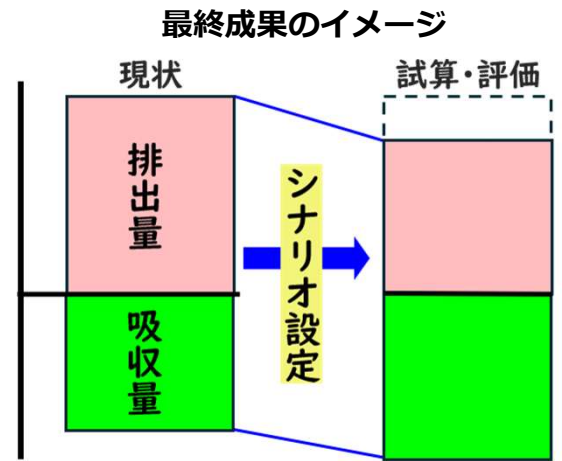


3 吸収源である天然林の面積



期待される効果

未利用バイオマスや地域資源を活用した環境調和型社会の形成、脱炭素に向けた方策の立案に貢献する。



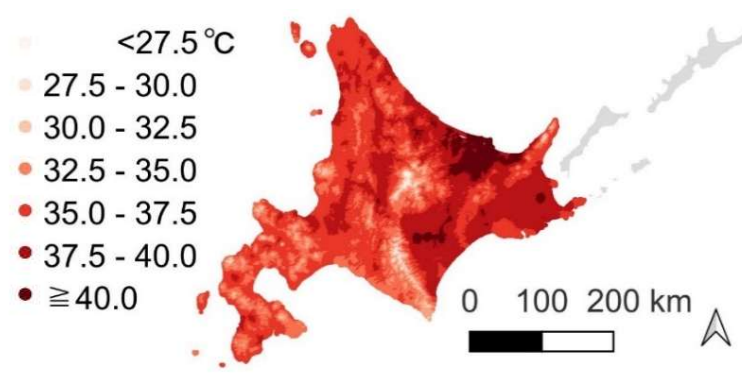
気候変動適応に向けたデータ解析と現状把握

背景

気候変動が懸念される中、将来の気候予測とともに、農林業への影響やリスク評価と適応策の策定が必要である。

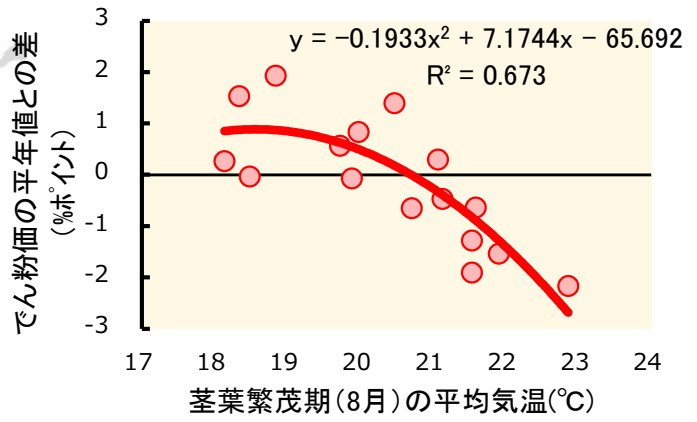
成果

1 気候変動データベースの整備



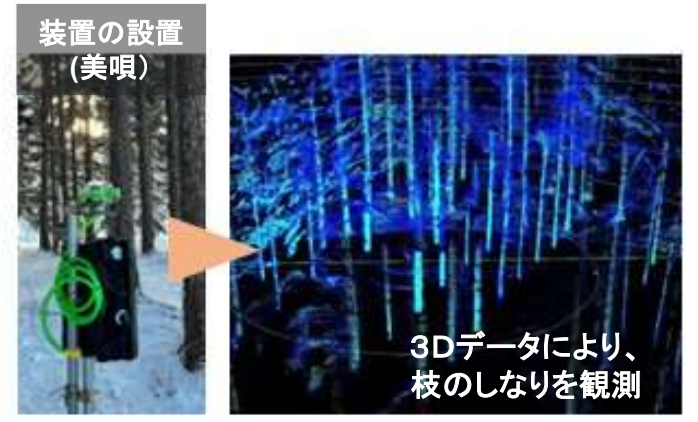
2070年代8月の最高気温分布の予測例

2 農業生産への影響評価



ばれいしょ生育期間の高温は
でん粉価を下げる

3 湿雪による林業への影響評価



LiDARにより着雪した枝のしなり具合を可視化
※樹冠：樹木の上の枝葉の集まり

期待される効果

農林業に対する気候変動の影響予測とリスク評価が可能となり、適応するための技術開発につながる。

直播栽培に向く美味しい水稻「空育198号」

背景

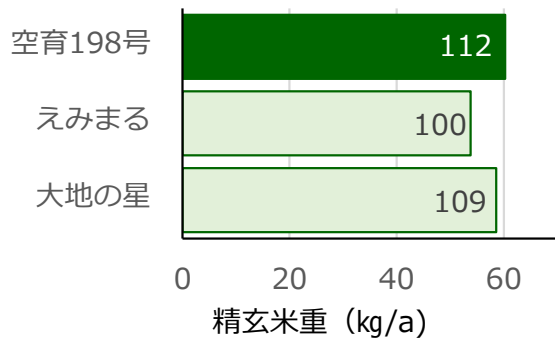
北海道米の安定生産には、直播栽培や高密度播種栽培など低コスト・省力栽培に向く品種が必要である。



直播栽培の「空育198号」

成果

1 直播栽培で多収（とれる）。さらに、倒伏しにくい。



* 図中の数字は「えみまる」比

直播ではトップクラスの収量性



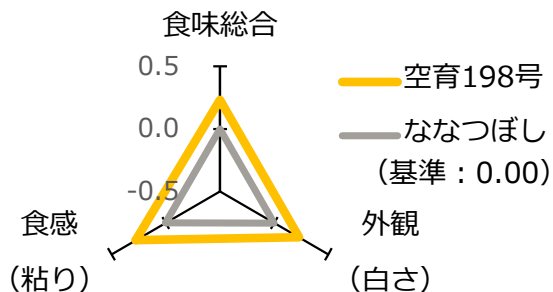
空育198号

えみまる

大地の星

早生で直播では倒伏が少なく安定生産可能

2 「ななつぼし」級の良食味



* -2 (不良) ~ +2 (良) の5段階評価

食味レベルは「ななつぼし」級

期待される効果

水稻栽培の省力化を推進し、北海道米の生産振興および持続可能な農業の実現に貢献する。

病虫害に強い加工用ばれいしょ「北育33号」

背景

加工用ばれいしょ新品种には、生産者の栽培しやすさ・優れた貯蔵性が求められ、実需者の加工用途は多岐にわたる。

成果

1 栽培しやすく 病虫害・障害にとっても強い

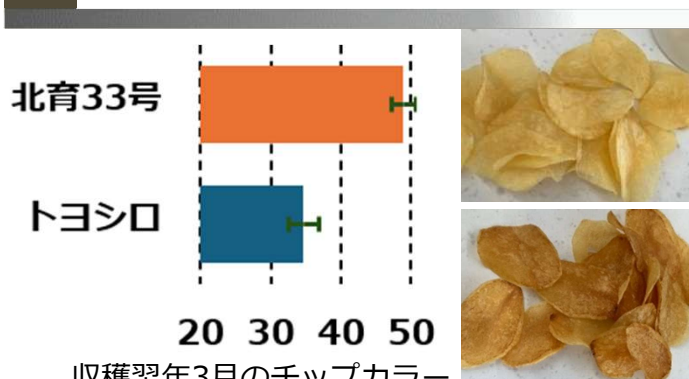


「北育33号」

「トヨシロ」

ジャガイモシストセンチュウ、そうか病、Yモザイク病や、収穫作業時の塊茎打撲にも強い

2 きれいなポテトチップス



収穫翌年3月のチップカラー
(値が大きいほどチップがきれい)

品質向上・長休眠性により
加工原料の長期安定供給

3 複数用途に適性あり

サラダ加工適性	実需者 A	実需者 B
フレッシュサラダ (手作り感がある商品で 賞味期間が短い)	3	4
ロングライフサラダ (長期保存ができる商品)	3	4

1(劣)～5(優)の5段階評価
(3以上で商品化可能な水準)

コロッケ、チルドパックにも利用可能

期待される効果

加工用ばれいしょの安定供給を可能とし、道産ばれいしょの生産振興に貢献する。

分担試験場：中央農業試験場、十勝農業試験場

共同研究機関（協力機関）：ホクレン農業協同組合連合会、（農研機構北海道農業研究センター、ばれいしょ加工適性研究会）

本成果の一部は、農研機構生研支援センター「戦略的スマート農業技術等の開発・改良（SA2-104P）」の研究成果である。



ホクレン
農業総合研究所
との共同開発で
初の育成品種

果樹の花粉媒介昆虫マメコバチの巣筒温湯浸漬による寄生ダニ対策

背景

マメコバチの巣となる巣筒内に繁殖した寄生ダニを、巣筒を破壊せずかつハチにも影響を与えずに防除する方法が必要である。



ツツハナコナダニに寄生されたマメコバチ

成果

1 寄生ダニの死滅条件

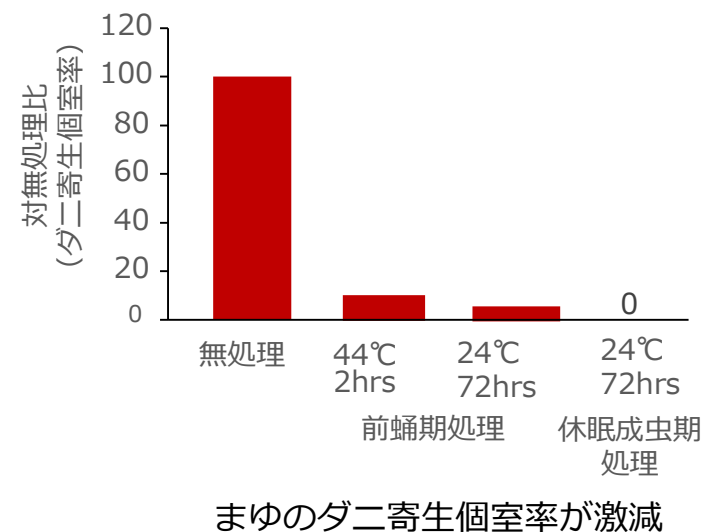


2 温湯浸漬で省力化



処理後は筒内の水を切ってすみやかに乾燥

3 寄生ダニを効果的に防除



期待される効果

りんごやおうとう等の着果が安定して収益性が向上し、さらにはイチゴなど果樹以外のバラ科作物でも利用拡大が期待される。

大豆有機栽培の雑草対策・密植・施肥技術の開発

背景

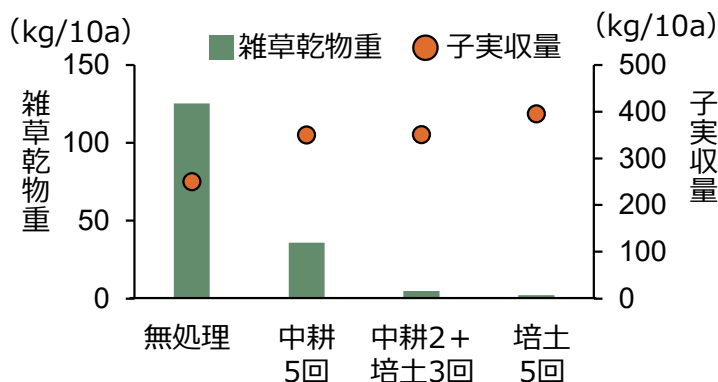
大豆の有機栽培は慣行栽培に比べて生育が劣り、低収になりやすいことから安定生産技術が必要である。



雑草対策に効果的な「豆類用カルチ培土板」

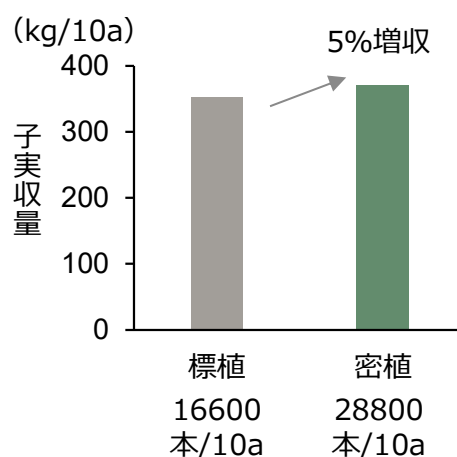
成果

1 雑草対策



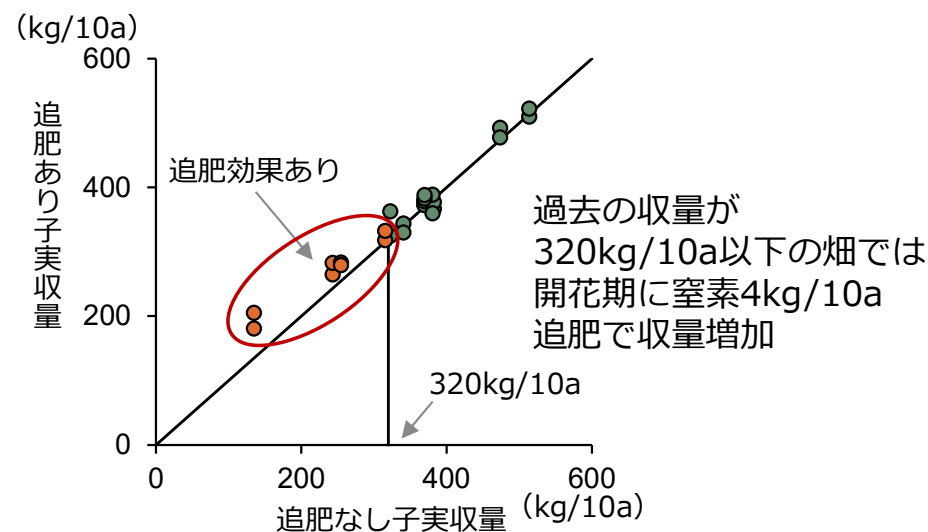
播種後2週目から開花期まで培土5回
→雑草を最も抑え、収量増

2 栽植密度



密植により収量増

3 開花期の追肥効果



期待される効果

大豆の有機栽培を安定化させることで、有機農業の面積拡大に寄与する。

農業法人の従業員が抱える課題と要望に見える化

背景

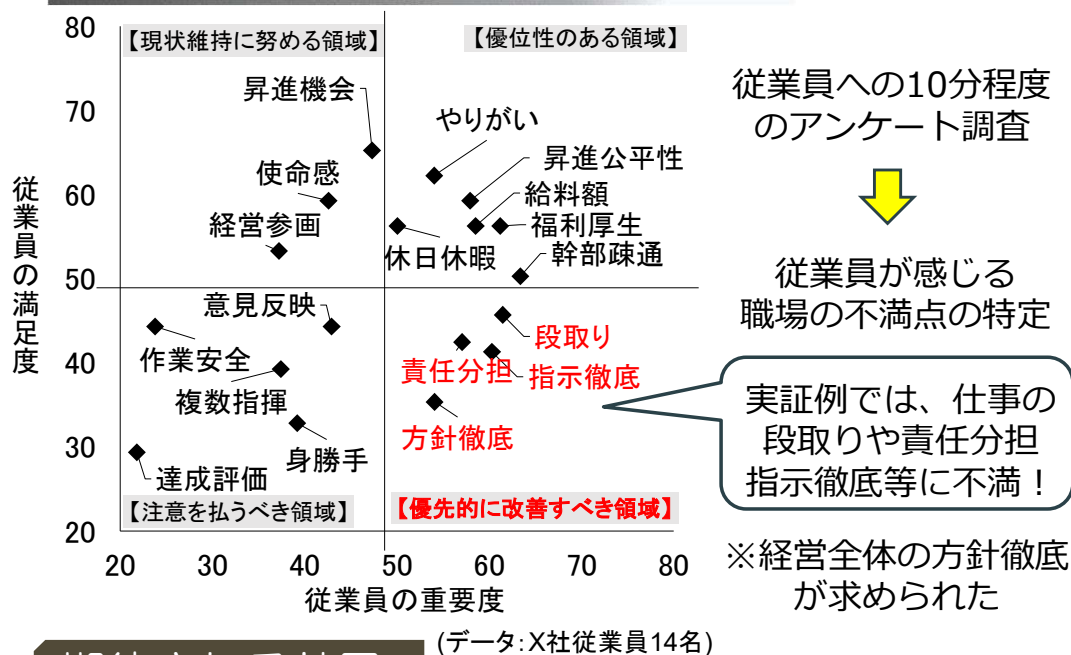
農業法人が増加しているが、従業員の定着率が低く、
職場の課題や従業員の要望を把握する方策が必要である。



従業員とのワークショップ

成果

1 職場の課題と不満に見える化



2 従業員の改善要望に見える化

	重要度	容易さ
会社のビジョン・方針の明確化	4.9	3.0
各課のビジョン・方針の明確化	4.8	4.5
社内会議の充実	4.5	3.9
役員・個人面談の充実	4.3	4.4
意見の反映	4.8	2.5
役員の理解醸成	4.6	2.5
懇親会を増やす	3.6	3.6
地域への貢献	4.1	2.5
話しやすい雰囲気づくり	4.9	3.3
朝礼・夕礼の実施	4.4	4.6

(黄色着色:「重要度」「容易さ」が4.0点以上の項目)

実証例では「経営全体の方針徹底」のため、課のビジョンの明確化、面談の充実、朝礼の実施等の対策を要望！

不満点の改善をテーマに従業員とのワークショップ

従業員の求める要望の整理、得点化

優先的な改善要望の見える化

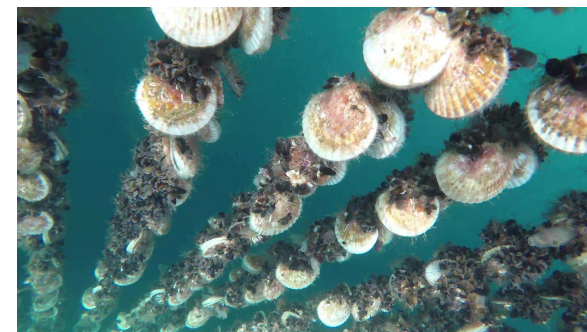
期待される効果

農業法人の職場環境が改善し、従業員の定着率が向上する。

夏季高水温による養殖ホタテ稚貝の大量死と深場養殖

背景

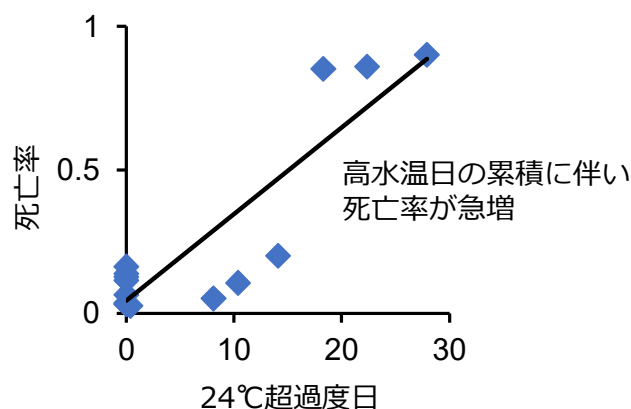
2024年夏季、高水温により道南の養殖ホタテガイ稚貝が大量死し、今後に向けた養殖方法の改良が急がれた。



養殖されているホタテガイ

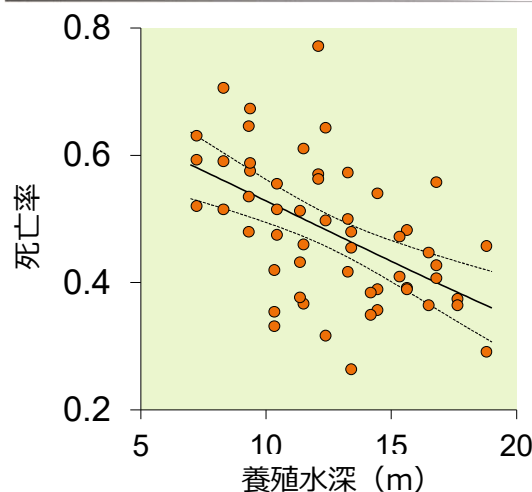
成果

1 高水温による大量死の実態を解明

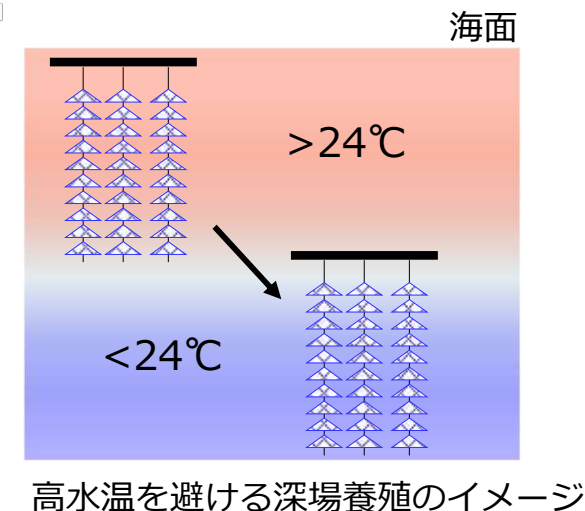


高水温指標と稚貝死亡率（2020～2024年、水深別）

2 深場養殖による死亡軽減策を実証



養殖水深と稚貝死亡率（線は回帰直線と誤差範囲）



高水温を避ける深場養殖のイメージ

期待される効果

夏季水温に応じた深場養殖の導入により、道南ホタテガイ養殖業の安定的生産と経営強化に資する。

成長履歴の解析によるサケの生残傾向の把握

背景

近年秋サケ資源が急激に減少しており、その要因を解明する上でサケ幼魚期の生残傾向を把握することが重要。



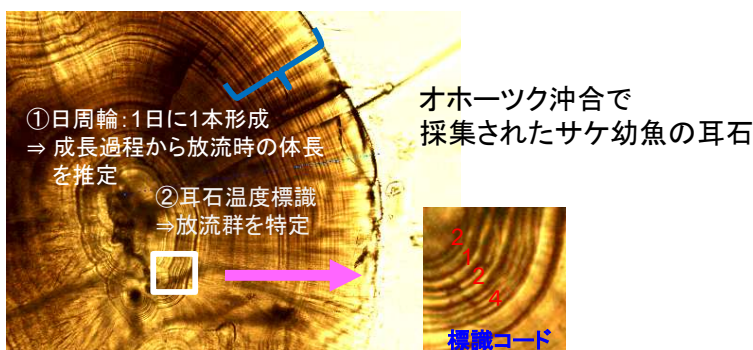
成果

1 サケ親魚の鱗による成長解析



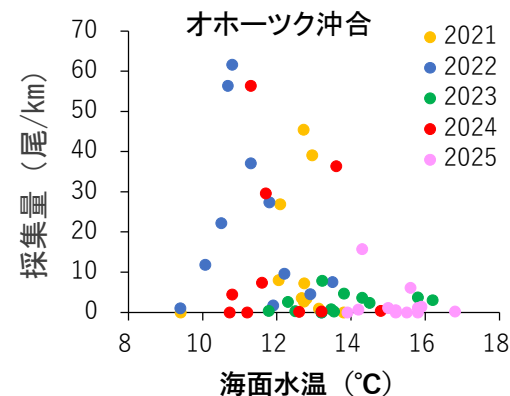
初期成長の高い個体が生残する傾向

2 サケ幼魚の耳石による成長解析



放流時の体長60mm以上で生残率向上の可能性

3 沖合域でのサケ幼魚分布



海水温が高い年にはサケ幼魚の分布密度が低い傾向

期待される効果

初期減耗を軽減できる放流サイズ、放流時期の検討への活用が期待される。

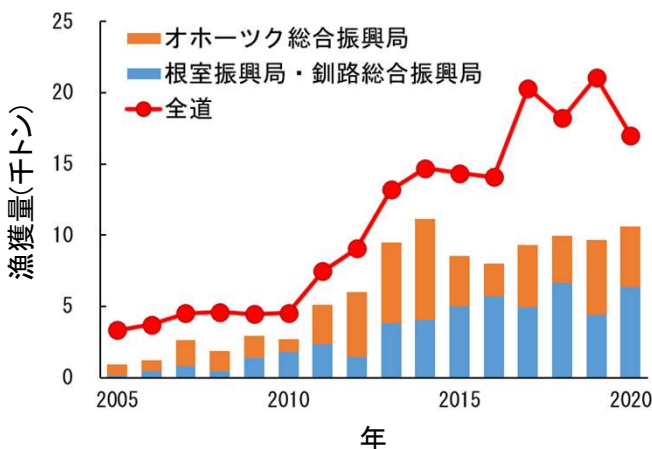
道産ニシンの活用に向けた生食用骨軟化技術の開発

背景

ニシンは小骨が多く喫食しづらいが、ニシンの漁獲量増加にともない、生食による高付加価値化が必要である。

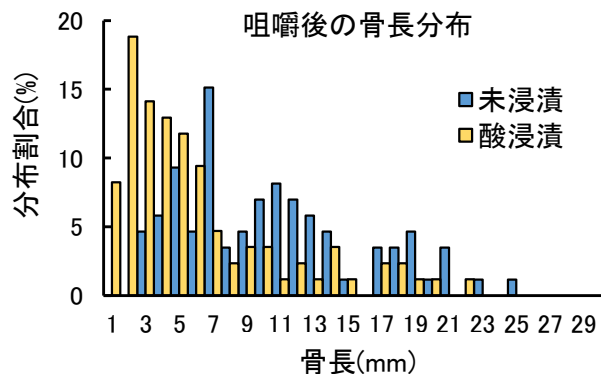
成果

1 道東におけるニシンの漁獲状況



道東ではニシンの漁獲量が増加傾向

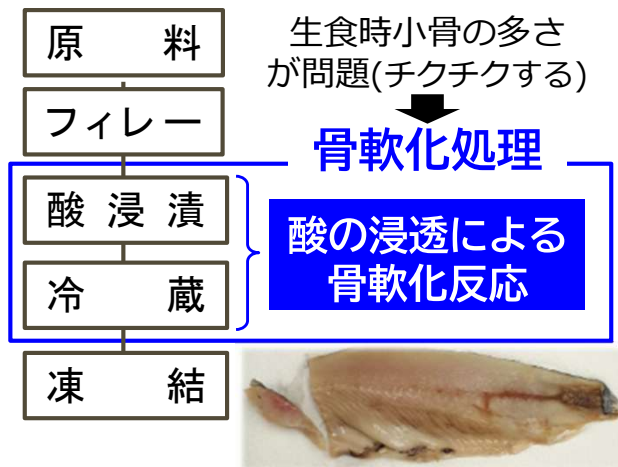
2 骨軟化基準の確立



酸浸漬で特定の平均骨長以下
にすることで骨軟化達成

ニシン小骨の骨軟化基準を確立

3 生食用骨軟化フィレー製造方法の開発



高価な設備投資が必要ない
簡易な製造方法を開発

期待される効果

非加熱による骨軟化技術を用いた製造方法を道内企業へ普及し、道産ニシンの新たな活用に寄与。

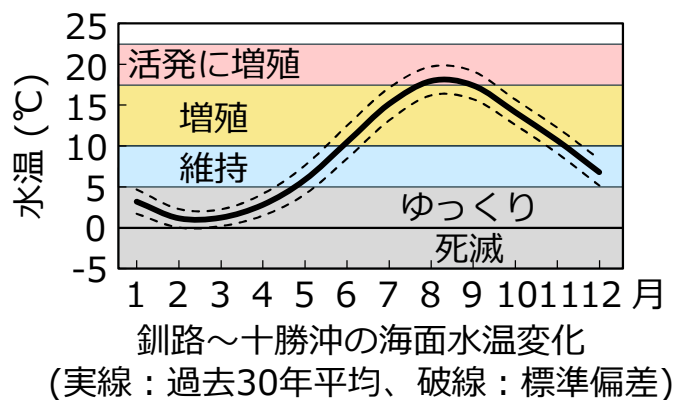
北海道太平洋大規模赤潮の発生予察体制の構築

背景

2021年に北海道太平洋で発生した大規模赤潮は甚大な漁業被害をもたらし、発生予察体制の構築が急務であった。

成果

1 原因生物の増殖適水温を分析



警戒時期を明確化
道東沖の監視期間は6～11月

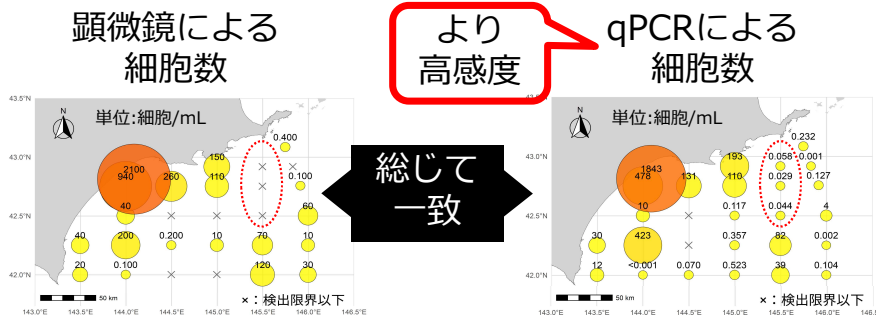
期待される効果

効率的かつ高精度な発生予察体制を構築し、漁業被害の最小化に寄与する。

2 遺伝子による高感度検出が可能に

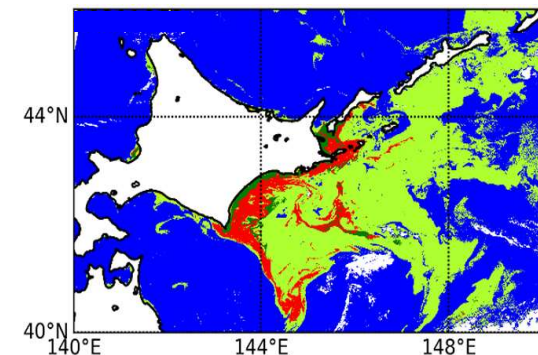
○調査船調査による監視体制を確立(北辰丸、金星丸)

○遺伝子分析(qPCR)により高感度で検出可能に
・2021/10/6-9の調査船調査結果(発生年増殖期)



・2025/9/27-10/3の調査船調査結果
：遺伝子分析では検出されず

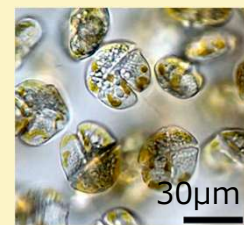
3 衛星による広域監視



**顕微鏡・遺伝子・衛星の
3本柱で赤潮監視を強化**

↓
予察体制の構築へ

渦鞭毛藻類の大増殖



大量のウニ殻
2021/9/30道新



カレニア・セリフォルミス
Karenia selliformis

- ・棘皮生物や魚類への強い毒性
- ・ウニ、秋サケ、タコ、ツブ類被害

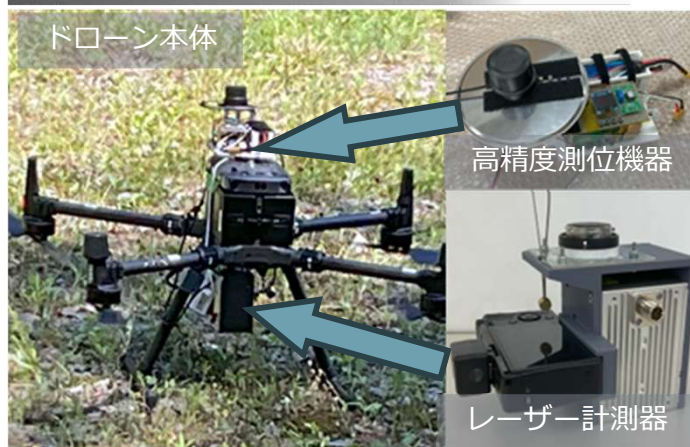
AI等先進技術を活用した森林資源量推定技術の開発

背景

森林資源を省力かつ高精度に把握するための手法が求められる一方、現場で簡便に運用可能な調査方法は確立されていなかった。

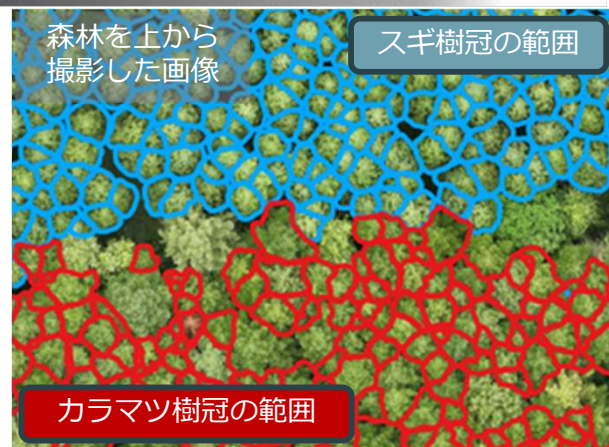
成果

1 高精度測位できる機材の開発



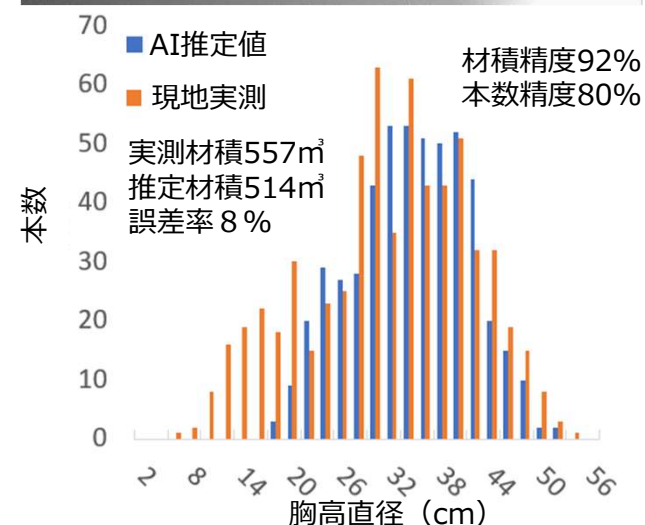
電波圏外の森林でも正確な位置と地表高を計測可能なドローン搭載機材を開発

2 単木の計測ができるAIの開発



開発AIで上空から人工林の樹冠（枝の広がり）検出やサイズ計測が可能になった

3 森林資源解析の実現



森林資源量推定で実用的な精度を達成

期待される効果

資源量推定精度の向上と現場の省力化を両立し、持続可能な森林管理に貢献する。

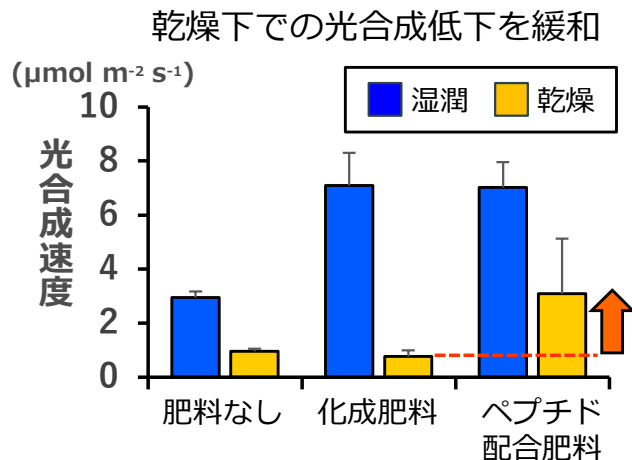
クリーンラーチ種子の品質向上技術の開発

背景

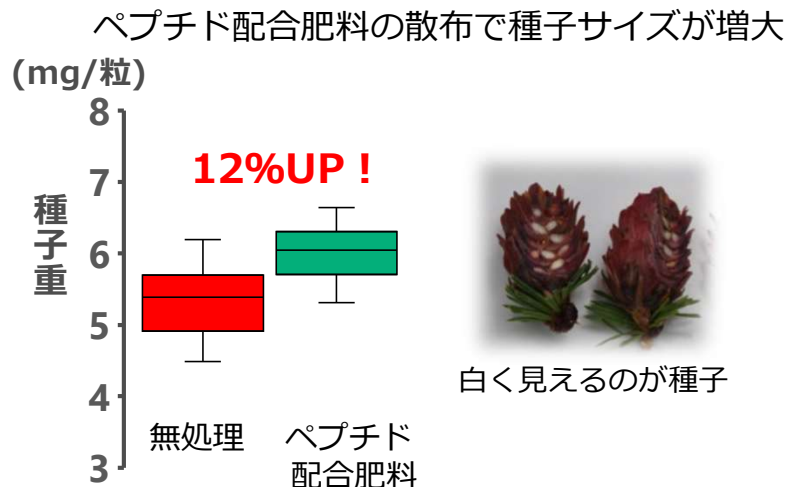
苗木の安定生産には、種子の発芽率や発芽速度の向上が重要。
近年の高温・乾燥ストレスへの対策も必要。

成果

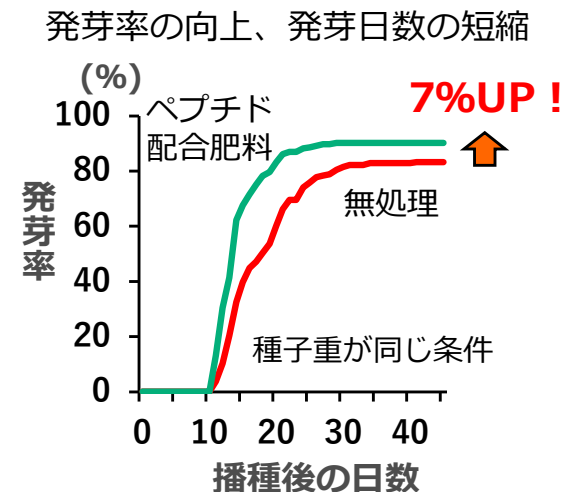
1 ペプチド※がストレス緩和



2 高温・乾燥年に種子品質が向上



現場で使える機材とともに普及



期待される効果

※ペプチド：アミノ酸が結合した化合物。近年、環境ストレスへの耐性を高める農業資材として注目される。

採種園における気候変動に対応した新たな資材としての活用を通じ、優れた特性を持つ種子の安定生産に貢献する。

おが粉の散水堆積によるマイタケの増収効果

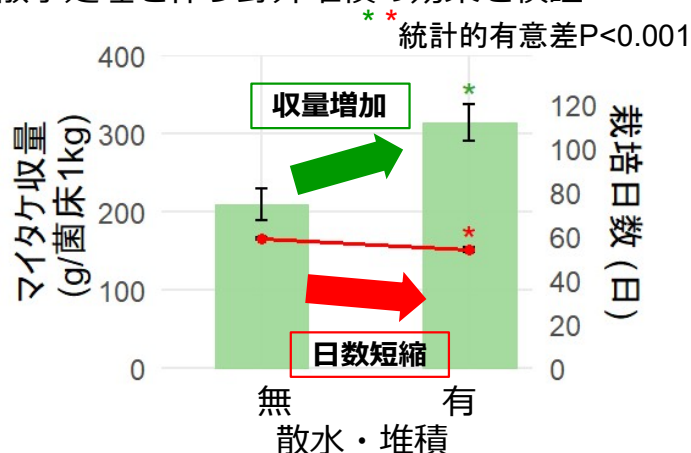
背景

マイタケ栽培用シラカンバおが粉は慣習的に半年以上の散水堆積※が行われているが、収量に及ぼす影響は明らかでなかった。

成果

1 散水・野外堆積は効果あり

散水処理を伴う野外堆積の効果を検証



期待される効果

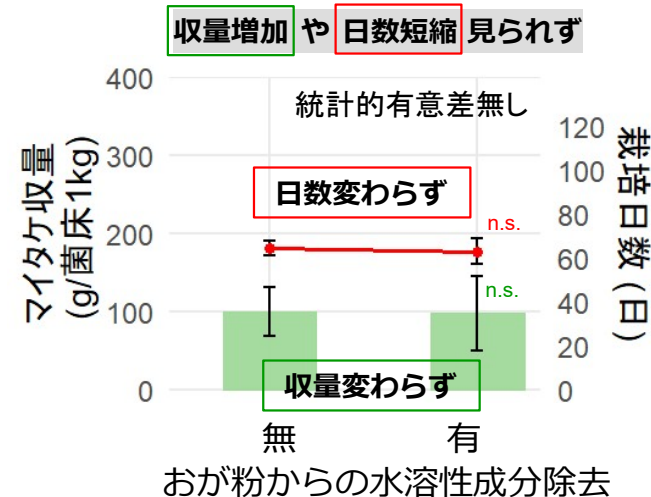
- ・収量改善による道内きのこと生産者の収益安定化や向上に貢献。
- ・コスト低減のための散水量低減等の発展研究に展開。

※業界では“アク抜き”と呼ばれ成長阻害物質低減を期待



2 散水量を低減できる可能性

【新しい知見】水溶性成分は成長に影響が少ない



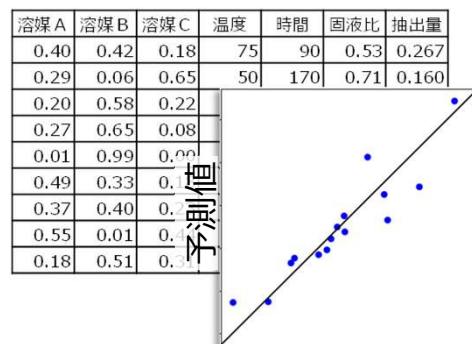
データ科学による化学プロセス設計の高効率化

背景

化学製品の製造工程では、多くの製造条件を最適化するために時間と手間がかかる。データ科学を用いて高効率化したい。

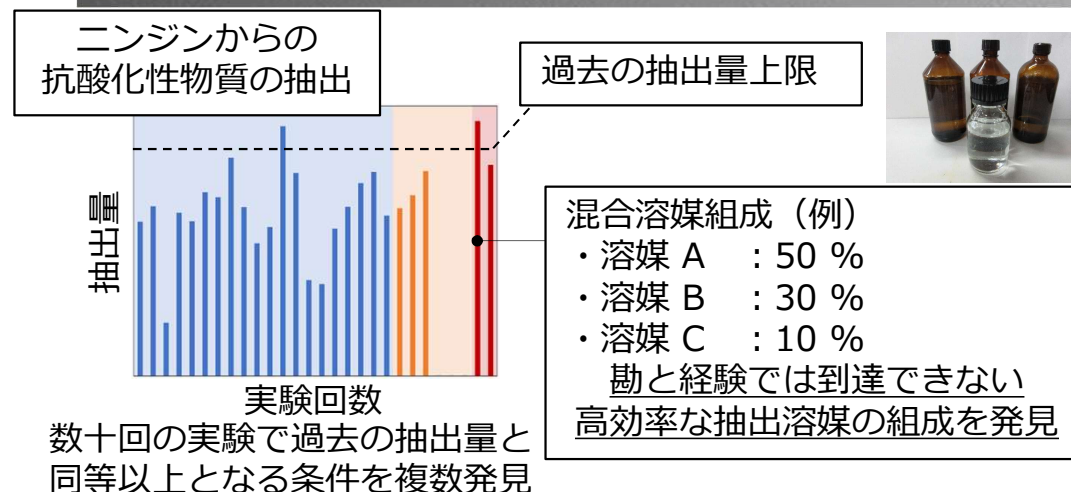
成果

1 データ科学の導入



AIと実験の併用による
機械学習モデルの構築と検証

2 ケーススタディーによる高効率化の確認

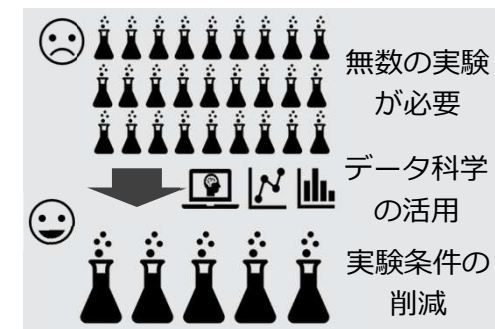


吸着・抽出・変換
の全部で4種類の
ケーススタディーを実施

適用の際の課題も
明らかにし、研究を継続中

期待される効果

企業において、経験や勘に頼らない、より早く無駄の少ない化学製品の製造に活用される。



データ科学※を活用することで
無数の実験条件を削減して最適化

※データ科学：機械学習や統計などを活用して
大量のデータから有用な情報を得る技術

青色光とAIを用いた木質化人参判別装置の開発

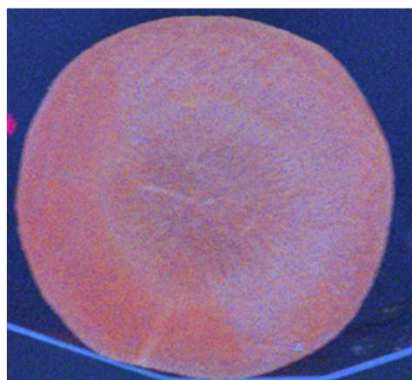
背景

人参の加工工場では、木質化人参の除去に多くの人手を要しており、その判別工程の自動化が必要である。

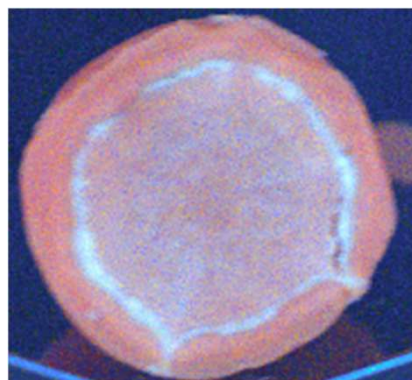
成果

1 正答率98.8%のAI判別手法を開発

木質化の成分が青色光で蛍光するため判別可能



良品人参の切断面（光らない）



木質化人参の切断面（光る）

期待される効果

全国の人参加工工場での利用が想定され、判別工程の人員9割を削減可能。
食品機械展FOOMA JAPANで普及を図る。



木質化人参は60人で判別・除去

人参の加工工場の現状

2 木質化人参判別装置を製品化予定

木質化人参判別装置を試作し
実証試験を実施

実証試験の結果

- ・正答率：約91.5%
- ・処理速度：約3本/秒



酒粕の風味を活かした粕漬けチーズの開発

背景

輸入ナチュラルチーズとの差別化に向けて、日本特有の素材を活用した特徴あるナチュラルチーズの開発が必要である。

成果

1 吟醸香成分の豊富な酒粕

- 純米大吟醸酒の酒粕は、吟醸香成分が豊富であることを明らかにした。

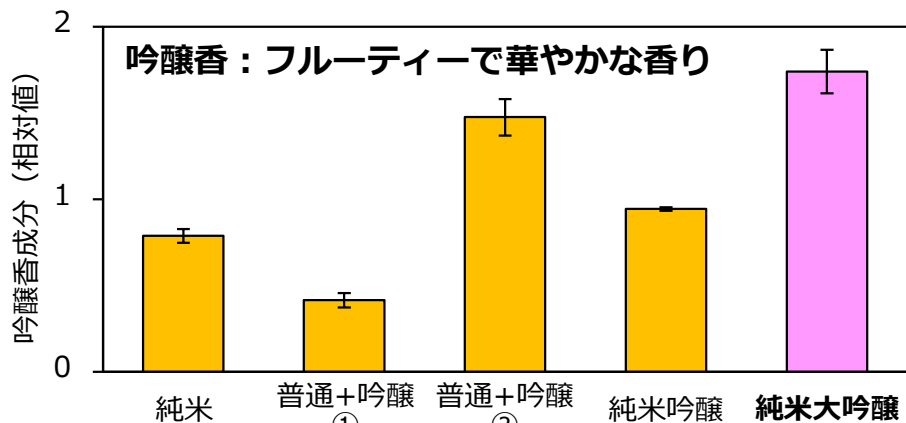


図 各種酒粕の吟醸香成分

2 粕漬けチーズの開発

- 純米大吟醸酒粕に3ヶ月間漬け込んだ粕漬けチーズを開発した。
- 粕漬けチーズは酒粕の吟醸香とチーズの旨味が調和した良好な食味であった。

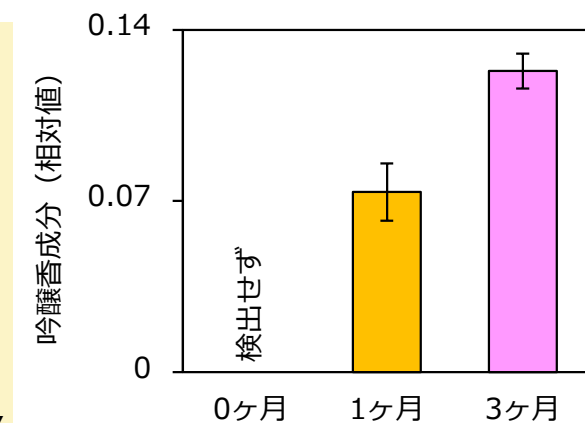
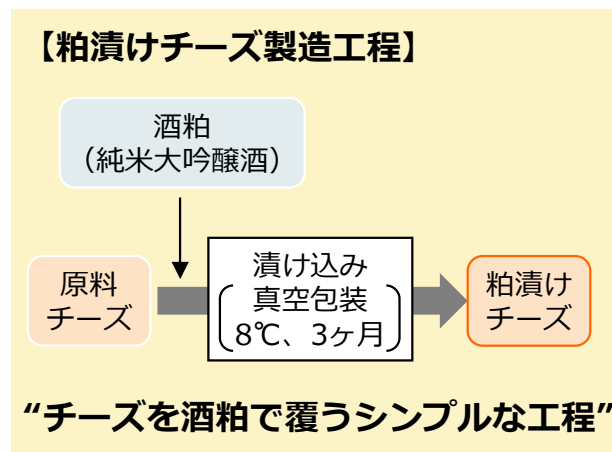


図 チーズ漬け込み中の吟醸香成分の変化

期待される効果

道内チーズ製造企業において、特徴的な風味を持つナチュラルチーズの製造に活用できる。

蓄熱池を用いた季節間蓄熱システムに関する基礎研究

背景

季節間の熱需給バランスを調整するための
実用的な熱エネルギー貯蔵システムの開発が急務となっている。

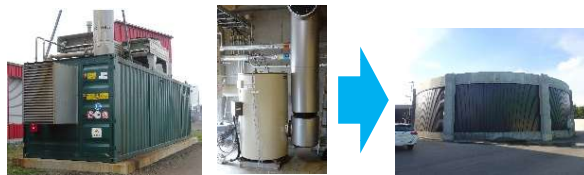
成果

1 蓄熱・利用の熱需給計算ツールの作成と熱需給評価

ツールを用いたケーススタディによる熱需給計算結果から、小型蓄熱池導入による重油使用量の抑制や園芸ハウスの導入可能数を把握

A. 現状設備（夏季に未利用熱発生）

熱供給部 熱需要部



バイオガス発電機排熱 重油ボイラー ぶん尿処理メタン発酵槽

B. 蓄熱池を用いた季節間蓄熱システム（冬季に未利用熱利用）

熱供給部 蓄熱部 熱需要部



バイオガス発電機排熱 重油ボイラー 蓄熱池と貯湯槽 蓄熱池大きさ30×30×3m 園芸ハウスを追加

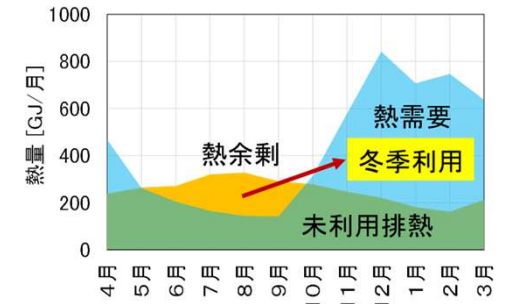
蓄熱システムの導入効果

設備条件		重油使用量 [L/year]
A. 現状設備		12,229
B. 蓄熱池を導入	ハウスなし	0
	ハウス1棟	0
	ハウス2棟	1,747
	ハウス3棟	7,733

※ハウスなし～1棟では、
バイオガス発電機の排熱のみを利用

期待される効果

本計算ツールは、熱利用システムの設計者が新たなシステムを設計する際に活用される。

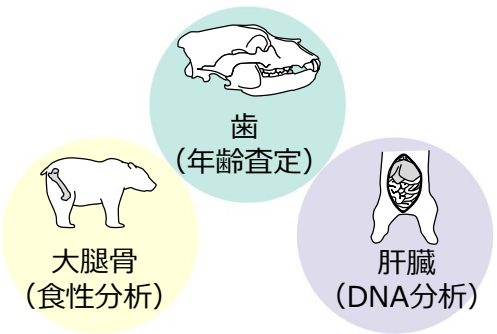


蓄熱池を利用したバイオガス発電時の排熱による季節間熱需給の例

ヒグマの生息およびあつれき動向の把握

背景

人身被害発生時に地域住民の安全を確保するには、平時からの継続的な試料・情報収集と、加害個体を迅速に分析できる体制が不可欠。

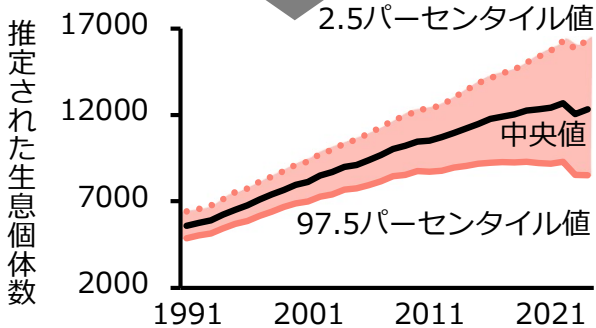


捕獲個体から得られる試料と分析内容

成果

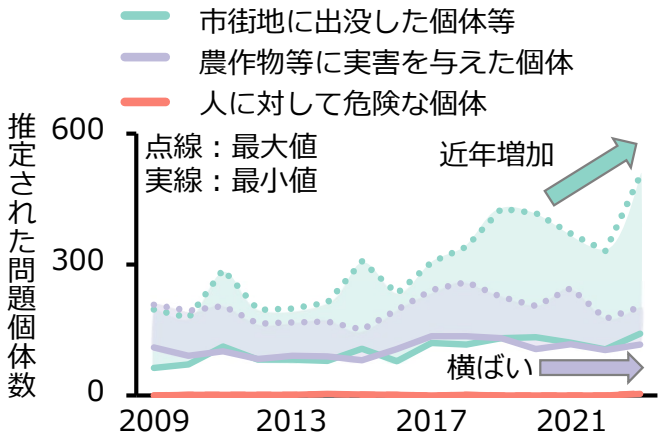
1 全道の個体数動向を推定

性齢別捕獲数・分布や被害の状況等



※R7第2回ヒグマ保護管理検討会資料3-1を改編

2 実害を及ぼす問題個体数を推定



※Tsuruga et al. (2026) *Popul. Ecol.*を改編

3 緊急DNA分析で加害個体の捕獲確認

試料採取	DNA抽出	個体特定
7/12	福島町で人身死亡被害発生 (2025年)	
7/14	被害現場でDNA試料を採取	
7/18	発表：2021年の加害個体と一致 現場周辺でヒグマ捕獲→緊急分析	
7/19	発表：加害個体の捕獲を確認	

生息状況把握のための基盤情報を整備

出没情報を蓄積し傾向を解析 (渡島半島地域)

加害個体を迅速に特定し住民不安を軽減

期待される効果

- 得られた知見は北海道ヒグマ管理計画に基づく施策の科学的根拠として活用。
- 迅速な試料分析や被害状況の把握、防除対策の普及により地域住民の安全確保に大きく貢献。

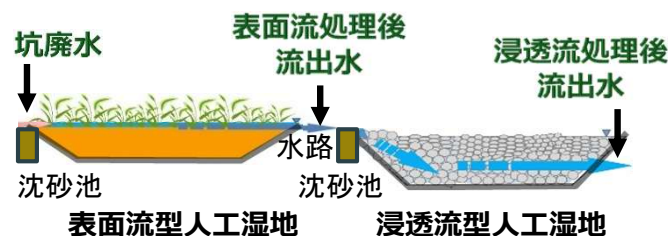
人工湿地坑廃水浄化システムの長期運用にむけた管理法の構築

背景

道内の休廃止鉱山から排出される坑廃水を、低コストでかつ長期にわたり安定的に処理するための運用管理法が必要である。

成果

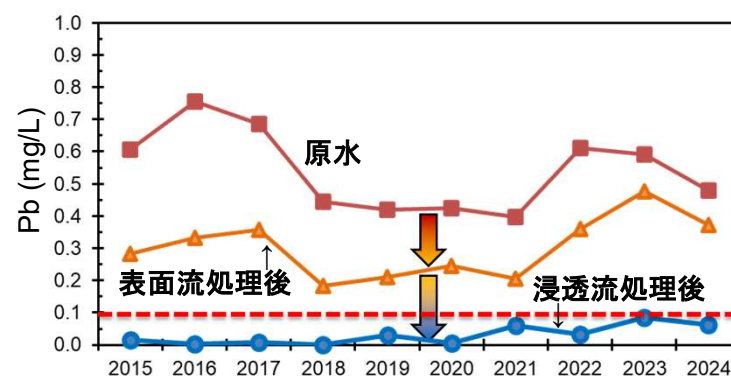
1 管理点検項目の体系化



【管理点検項目】

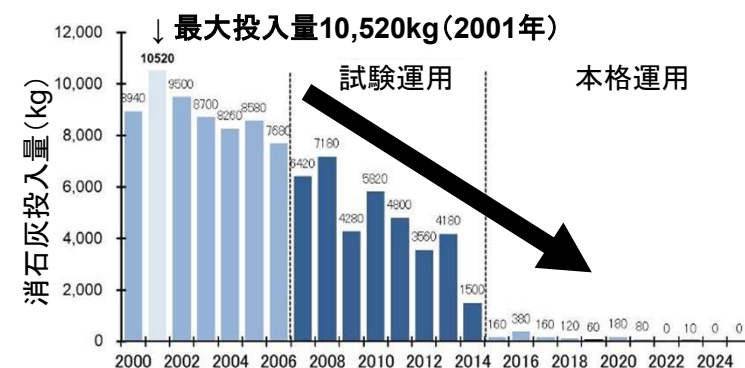
- 出水時に対応した施設配置（沈砂池・導水路等）
- 湿地の水深維持（盛土等）
- 水路の機能維持（清掃）
- 遮水シート（灰色太線）の確認・補修

2 長期的な処理性能保持を確認



10年にわたり排水基準値（赤点線）をクリア

3 薬剤投入量の大幅低減



薬剤投入量をほぼ0に



人工湿地坑廃水浄化システム（全景）

期待される効果

国のシステム導入ガイドラインに掲載→道内外の休廃止鉱山における坑廃水処理コストを大きく低減。

空き家・空き家予備軍の実態把握ツールの開発

背景

近年、空き家の増大が社会問題化する中で、空き家を早期に発見し、活用につなげていくことが必要。

成果

1 空き家・空き家予備軍を特定

市町村が持つデータから空き家を8割超の精度で特定可能なツールが完成

GIS上で建物登記情報と住民基本台帳を重ね合わせる

住宅の上に世帯の
ポイントが重ならない
⇒**空き家**

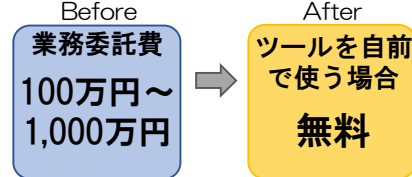
高齢者のみの世帯の
ポイントが重なっている
⇒**空き家予備軍**



【空き家の特定にかかる時間】



【空き家の特定にかかる費用】

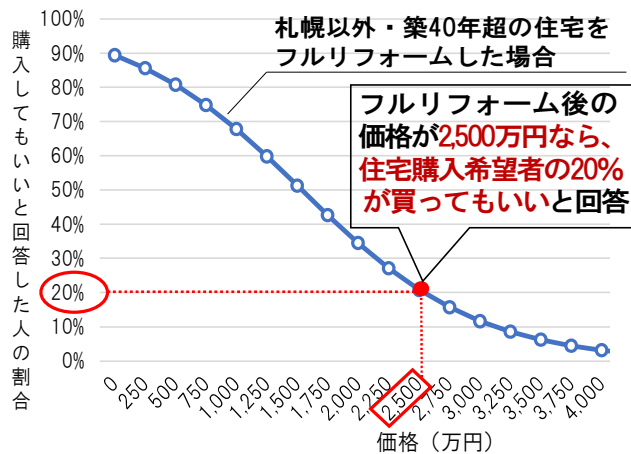


写真：開発したツールの機材一式と空き家等の特定結果画面

2 空き家の流通ポテンシャルを推計

全道各地の空き家に関心者がつく確率が推計可能

道内の住宅購入希望者へのアンケート調査



▶ 社会実験で流通ポテンシャルを提示

▶ 空き家を売りたいと思う所有者が増加

期待される効果

市町村による空き家の実態把握が容易になり、空き家の早期発見と活用促進が可能となる。

日本海沿岸の最大クラスの地震・津波による被害想定

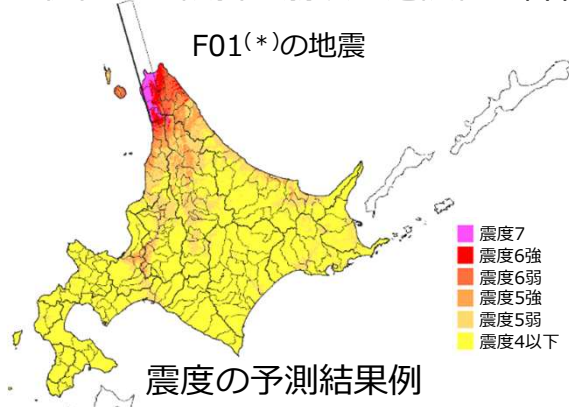
背景

日本海沿岸の最大クラスの地震・津波から「命を守る」ため、具体的な被害を想定し減災対策を行うことが重要。

成果

1 地震ハザードの評価

日本海沿岸15地震について震度分布や液状化・急傾斜地崩壊の危険性を評価



期待される効果

道の「防災・減災対策指針 (R8.2)」に反映されており、道内市町村の地震・津波対策で活用される。

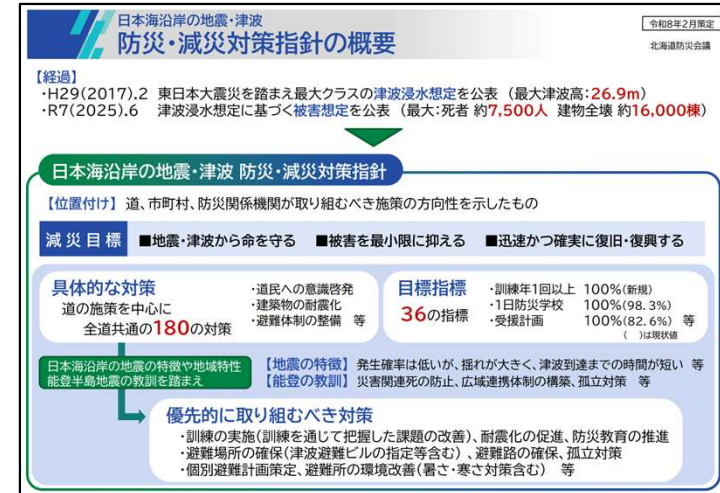
2 被害量の推計

建物被害、人的被害（死者・負傷者）、避難者数、インフラ・ライフライン被害等を推計

被害想定結果（死者と建物被害）

想定項目		F01(*)の地震		
		夏・昼	冬・夕	冬・深夜
死者数	津波	約7,000人	約5,500人	約5,100人
	建物倒壊	約80人	約470人	約600人
建物倒壊棟数		約5,300棟	約12,000棟	約12,000棟

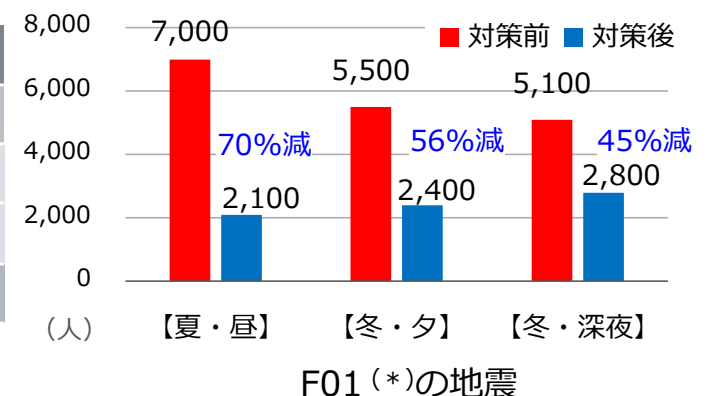
※ 死者数は、早期に避難する人が少なく津波避難ビル等への避難を考慮しないケース



道の「防災・減災対策指針」に反映

3 減災対策効果の予測

早期避難を可能とする対策を実施することによる、津波死者数の低減効果を明らかにし、指針へ反映



AIを用いたRC造建築物外壁劣化調査システムの開発

背景

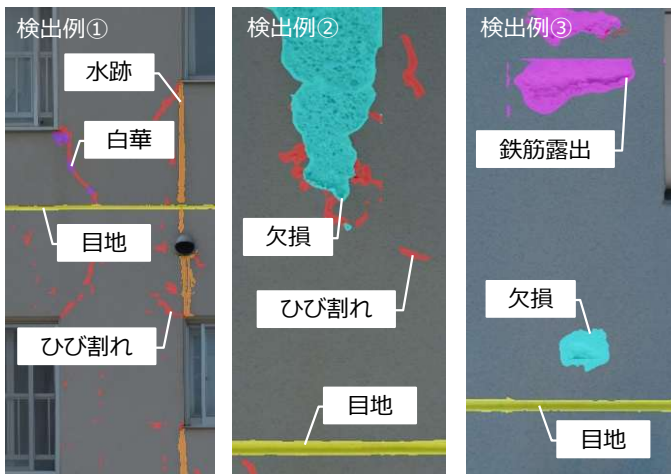
- ・老朽化したRC造建築物の数が増大、改修・建替での劣化調査の負担増
- ・従来の調査手法では作業労力や調査の正確性等が課題。

※RC造：鉄筋コンクリート造

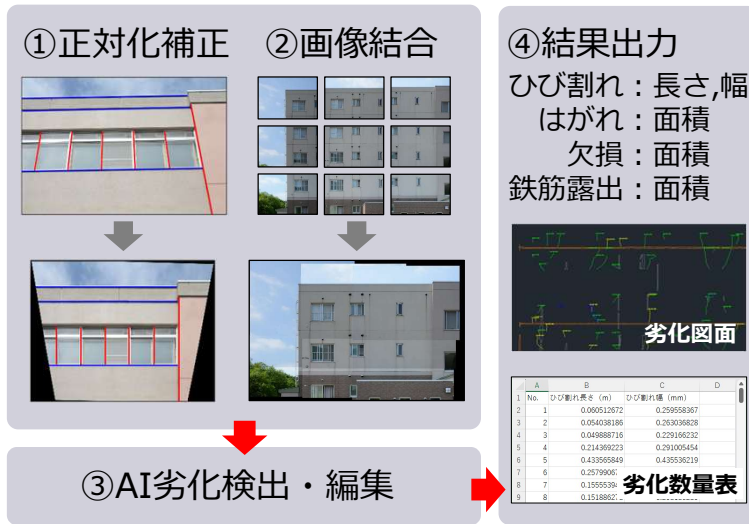
成果

1 外壁劣化検出AIの開発

写真から各種劣化を精度良く検出

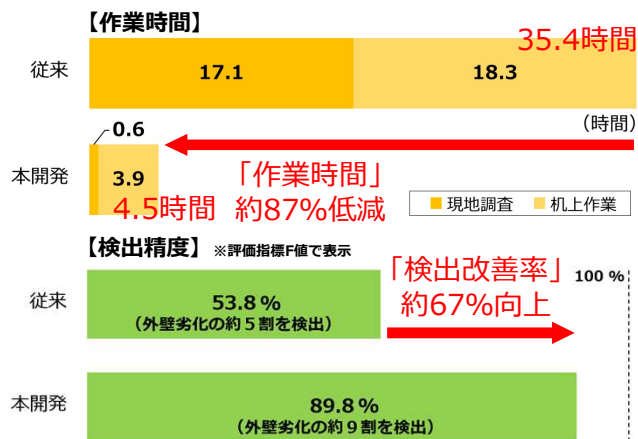


2 調査支援ソフトウェアの開発



3 システム有効性の検証

作業時間を大幅低減・検出精度を大幅向上
(4階建・延床面積：25,297㎡の場合)



期待される効果

自治体や民間の技術者によるRC造建築物の外壁劣化調査等における省力化や精度向上に貢献。